

# 紀元前1世紀～後5世紀における中国北辺の金属製装身具の研究 - いわゆる鮮卑の遺跡を中心として -

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-05 キーワード: 作成者: 大谷, 育恵, Otani, Ikue メールアドレス: 所属: 金沢大学, 金沢大学, 金沢大学
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/38891">http://hdl.handle.net/2297/38891</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



本論は考古資料に基づいた鮮卑研究、すなわち鮮卑考古学について考え、鮮卑考古学という枠組みを前提とした従来の遺跡類型化研究とは異なる側面から鮮卑の遺跡を検討するため、金属製装身具を具体的資料として取り上げ論じたものである。

第Ⅰ部では鮮卑考古学の研究史とその論点について概観し、鮮卑考古学に内在する問題点を指摘した。まず研究史について見てゆくと、鮮卑考古学という1つのテーマを生み、その後の研究の骨格を作ったのは1970年代末に宿白が発表した3篇の論文である。宿白が示したのは、①鮮卑に関連する遺跡の存在、②拓跋鮮卑の南遷経路、という2点である。宿白は鮮卑を東部鮮卑と拓跋鮮卑に二分してとらえ、このうち拓跋鮮卑については時期的な観点から初期鮮卑と代魏期にさらに二分し、鮮卑を合計三大別して捉えている。そして各鮮卑が遺した遺跡を提示して考古資料と鮮卑研究を結びつけた。中でも重要な意味を持つ遺跡は大興安嶺山中の嘎仙洞<sup>かつせんどう</sup>で、岩壁に刻まれた「太平真君4年祝文」が『魏書』礼志に記載された故地に至り祖先を祀ったという記事と符合することから、鮮卑の故地が内蒙古北部に実在していた考古学的証拠として位置付けられている。そして同論文では、『魏書』序記に記載された拓跋鮮卑が時代と共に次第に南に移動してゆく南遷についても遺跡に基づいて移動経路を示した。考古資料と鮮卑が結びつけられたことによって、紀元前1世紀末以降、中国北方にある中原の墓とは異なる北方的要素をもつ墓葬は鮮卑の遺跡に族属比定されることになった。

これに対して筆者は、鮮卑考古学はその構想時より考古資料による族属比定と南遷という2つの問題を抱えていると考えている。まず族属については、墓誌が出土することから検証可能な北魏平城期の発掘成果を例に挙げ、考古資料に基づいて族属を判断することは難しいことを示した。しかし、考古資料の差に基づいて遺跡を分類することは可能である。宿白が構想した時点から比べると発掘調査の進展に伴い鮮卑に比定される遺跡は増加しており、新たに増加した鮮卑の遺跡を加えて遺跡間の類型化研究が盛んに行われている。その総体的な遺跡類型案は喬梁と孫危によって示されている。それは墓葬形態と副葬品という複合的な考古資料に基づいて遺跡を分類したもので、その区分自体は妥当な分類であり、両論者の遺跡間の類型区分も基本的に一致し、既存の資料に基づいた研究の到達点を示している。しかしその後も鮮卑考古学がその枠組み内にある遺跡のみを対象として類型化と南遷過程のどの段階にあたるものであるかを論じることが研究の中心テーマであるのは問題があるだろう。その理由は南遷という考え方にある。南遷に関連する1つ目の問題点は嘎仙洞遺跡<sup>かつせんどう</sup>の位置づけで、祭祀文の発見によって裏付けられた事とは太平真君4年(443)に北魏の使者が実際に訪れていたという点に限定されるのであって、拓跋部の起源地が内蒙古北部に存在したという点ではないのである。そして南遷の2つ目の問題点は文化の連続性である。本稿は第Ⅱ部以降、北魏平城期を特徴づける標準的な土器群である暗文を施した細頸壺と平沿罐・盤口罐を指標として2期に区分したが、これら暗文土器の起源は明らかになっておらず、初期鮮卑の時期に相当する第1期と代魏期に相当する第2期の間には隔絶がある。また、第1期に限っても、初期鮮卑の遺跡は①:内蒙古北部の呼倫貝爾草原、②:内蒙古中南部、③:①と②の

中間地帯の内蒙古東部という3地域に分布しているが、③については宿白論以降遺跡数が増加しておらず、南遷を想定できるかは疑問である。南遷とは時代の推移と共にその集団自体が南へ移動してゆくという考え方であるため、遺跡を類型化したとしても各類型の差は年代的な差、あるいは発展段階の差として吸収される余地がある。したがってこれら問題を解決するために必要な鮮卑考古学の課題は、ある一定地域を単位として鮮卑の遺跡の前後時期を含めた編年を組み立てること、各段階の鮮卑の遺跡と隣接地域の遺跡とを比較してみることであると言える。前者を検討するには調査遺跡が報告公表されているかどうかという問題があるため、本稿は後者の課題について金属製の装身具を資料に選び検討した。

第Ⅱ部は金属製装身具の検討部分である。まず金属製装身具について述べると、金属製装身具とは金、銀、銅ほか様々な金属で製作した装身具の総称である。金属製装身具は金属という素材の性質から土器のように細かな編年や分布範囲を出すには適当な資料ではない。しかし一方でこれを資料とする利点としては、注目すべき資料として報告あるいは博物館施設で展出される可能性が高く普遍的に資料を集めることができる点である。集めた装身具はその形状と機能が身体上の装飾部位と結びついているため、頭飾、耳飾、頸部飾、帯飾、指輪に分類した。そしてこれに用途不明のため分類ができない板状の飾りを牌飾として加え、全体を6種類に分類してとらえた。金属製装身具は鮮卑の遺跡で出土している型式の装身具について、ロシアザバイカル地域や江南など鮮卑の遺跡という枠組みを超えて同一型式の資料を徹底的に集成した。

まず第1章と第2章で検討したのは第1期、すなわち初期鮮卑の資料である。第1期の初期鮮卑の遺跡からは耳飾、牌飾、帯飾、指輪の4種が出土している。耳飾は扭絲耳飾、単環耳飾、渦文耳飾の3型式、牌飾は外形を規定する枠の有無によって動物文牌飾と長方形牌飾に二分し、動物文牌飾を有鬃馬形牌飾、鹿形牌飾、馬形牌飾の3型式、長方形牌飾は三鹿文牌飾を設定した。指輪はd式のみである。その分布についてみてゆくと、耳飾は大興安嶺を境に渦文耳飾と単環耳飾が内蒙古高原、扭絲耳飾が東北平原と大きく分布が分かれる。渦文耳飾と単環耳飾と同様に内蒙古高原の南北に長く分布するのは三鹿文牌飾である。一方でそれ以外の動物形牌飾と格子文牌飾は西晋並行期に内蒙古中南部でのみ出土している。以上をみると、第1期の初期鮮卑の金属製装身具はいずれも内蒙古高原に分布があり、前者は宿白が想定した南北に長い鮮卑の南遷経路の遺跡を全て含んでおり、後者は西晋並行期の段階の鮮卑の遺跡が分布する内蒙古中南部に一致していると言える。

しかしながら同じく第1期である帯飾の飛馬文帯と馬文帯の帯金具を集成すると、この帯金具はおよそ北緯40°以北の西はサヤン山脈から東は中国東北部にかけて東西に広い範囲で出土していることが明らかになった。帯金具が出土した遺跡の年代は前漢末～後漢並行期である。この場合には明らかに帯金具が出土した各遺跡の土器組成や型式は異なっており、考古学的な観点からはそれぞれ異なる文化に属している。考古資料の上では異なる文化に属すこれら遺跡をつなぐ何らかの紐帯が存在したことが考えられる。したがって、第1期の時期に相当する遺跡から出土した

金属製装身具を検討した結果、第1期の装身具は内蒙古高原に分布があり、初期鮮卑の遺跡というまとまりや西晋並行期の内蒙古中南部での類型区分と重なる結果になったものの、一方では高緯度地帯で東西に長い分布を持つ装身具もあることが明らかになった。

第3章以下は第2期の金属製装身具について検討した。第2期には拓跋部が代とそれに続く魏を、慕容部が三燕を異なる地で建国したため、両者を分けて検討した。前者を扱ったのが第3章である。北魏は太和18年(494)に洛陽に遷都するまで平城を都としており、山西省大同市近郊には多くの平城期の北魏墓が分布している。近年報告が相次いで出されたため様相を把握できるようになってきている。これら代魏期の遺跡で出土している装身具は頭飾、耳飾、頸部飾、牌飾、指輪である。頭飾は頭部結束具、耳飾は垂飾付耳飾(a, b)、小環付耳飾、穿珠耳飾、石料象嵌耳飾があり、頸部飾は方形の突出部のある三日月形の頸部飾、指輪は指輪Bc、Bg、Bh式である。これら代魏期の金属製装身具の中に第1期と同一型式あるいはその系譜をひく装身具はなく、いずれもこの時期新たに出現する。第2期の指標とした暗文を施した土器も第1期の土器とはつながらずまたその起源と形成過程も明らかになっていないが、金属製装身具についても同様である。それではこれら新たに登場した代魏期の装身具の中でその他地域との関係が判明するものはといえば、穿珠耳飾と貴石を象嵌した指輪Bh式の2つである。穿珠耳飾についてはソグド墓である史君墓出土の耳飾とアフラシアブの壁画を例に挙げて中央ユーラシアの耳飾と共通する資料であることを示した。指輪Bh式については、貴石に画像を刻んだ印章指輪が北齊の墓で出土しておりソグド人の活動に伴い流入したことが指摘されていたが、さらに時代を遡り北魏平城期の遺跡ですでにこの型式の指輪が流入していることを指摘した。北魏平城期の遺跡からは西方で製作された銀器が出土し始めることが注目されていたが、金属製装身具のうち穿珠耳飾と指輪Bh式についても西とのつながりを指摘できる資料であることが明らかになった。また西とのつながりだけではなく、方形の突出部をもつ頸部飾はロシアザバイカル地域の中世初期の文化といわれるブルホトウイ文化の遺跡やモンゴル国内で出土例があり、北方とのつながりが指摘できる資料である。代魏期の金属製装身具は第1期の装身具を継承していないが、逆に代魏期の金属製装身具はその後北朝隋唐にかけて中国北部地域を中心に同一型式の装身具が継続して出土していることが明らかになった。

第5章では三燕について検討した。三燕の遺跡は遼寧省西部の大凌河流域を中心に確認されている。三燕の遺跡から出土した装身具は頭飾、耳飾、頸部飾、帯飾、牌飾、指輪である。頭飾には步揺と金璫があり、耳飾は扭<sup>じゅうしじゅうし</sup>絲帶葉耳飾、半月板帶葉耳飾、円形葉耳飾に分類し、頸部飾はいわゆる月牙形牌飾、牌飾には正方形透飾、半月形飾、楕円形懸飾がある。各種装身具を集成した結果、三燕の装身具は、①三燕独自の装身具、②六朝と共通する装身具、③後漢以来の東北平原の装身具、④内蒙古高原側の系譜をひく装身具という異なる4つの系譜をひく装身具から構成されていることが明らかになった。三燕の装身具の中に異なる地域の装身具が含まれている理由については、②については前燕が勢力を蓄え国家としての体制を整えてゆ

く段階に東晋の冊封を受けていたことが関係しており、身分を表象するものとして江南の金属製装身具もとりこまれたものと考えた。③については前段階第1期の扶余と三燕の領域の北限が重なるかあるいは徙民の影響と考えた。三燕では独特の金属工芸が開花したと言われてきたが、金属製装身具を例にとると装身具の種類自体は決して三燕独自の型式の装身具というわけではなく、三燕の領域内で自ら制作しているため結果として三燕独自の風格が生まれているといえる。

鮮卑考古学は遺跡の類型化については論考が多く発表されているものの、鮮卑の遺跡という枠組みを外し、そこから出土している遺物を主として地域横断的に考察した研究は少ない。本論の金属製装身具を資料とした研究はそのような観点に立ち考察を行ったものである。金属製装身具は資料の性質上広い分布のまとまりを示すことになるが、鮮卑に比定されている遺跡で出土している遺物に基づいた一つの分析として有効であると考えている。